

ベルリン新ナショナルギャラリーの観察において獲得される数々の視点について

浦 野 歩

《序：寸法》

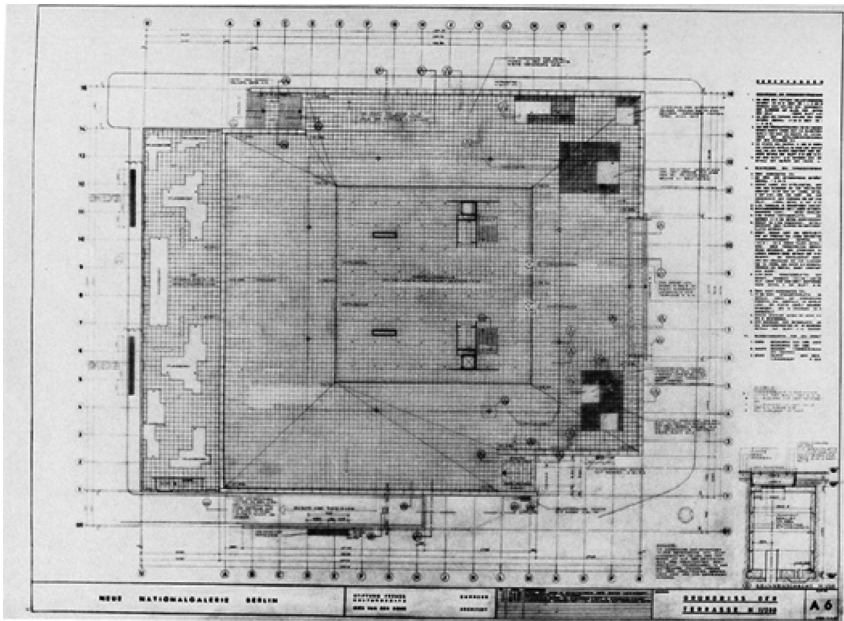
ドイツ、ベルリンのポツダム通り沿い、ラントヴェーアカナル（Landwehrkanal）に面した土地に、1968年、新ナショナルギャラリー（Neue Nationalgalerie）が建設された。その設計者はミース・ファン・デル・ローエ（Mies van der Rohe, 1886-1969, 以下ミース）である。

以下、実寸の大きさを提示しておく。地上部には、四方をガラスで覆われた正方形の空間を持つ建物が、346×362 フィート（約 105×110m）の広さを持つ基壇の上に建っている。その空間の上には正方形の、分厚い鉄板のように見える陸屋根が、鉄柱で持ち上げられている。鉄柱と屋根はともに黒錆で防食塗装されているために黒く見えるが、その一方で、建物の基壇は御影岩張りとなっているために白く見える。屋根全体の寸法は 213 フィート（約 65m）四方、厚さ 6 フィート（1.8m）である。その屋根の下部の天井には、ウェブ梁^①によって区切られた 12 フィート（3.6m）四方の正方形（以下、この一辺を 1 スパンとする）が計 18×18 個並んでいる。ウェブの下端にはフランジ^②がつけられ、下から見上げるとこのフランジによって天井が正方形に区切られているように見える。総重量 1250t もの重さを持つ鉄の屋根は、辺々それぞれ 2 本の十字型鉄柱、計 8 本によって支えられている。鉄柱は、高さ 28 フィート（約 8.5m）のところで屋根の縁にピン接合されている。その屋根の下に広がるガラスのホールは、屋根の四辺それぞれから 2 スパン分セットバックしており、177 フィート（約 54m）四方の広さの空間となっている。^③

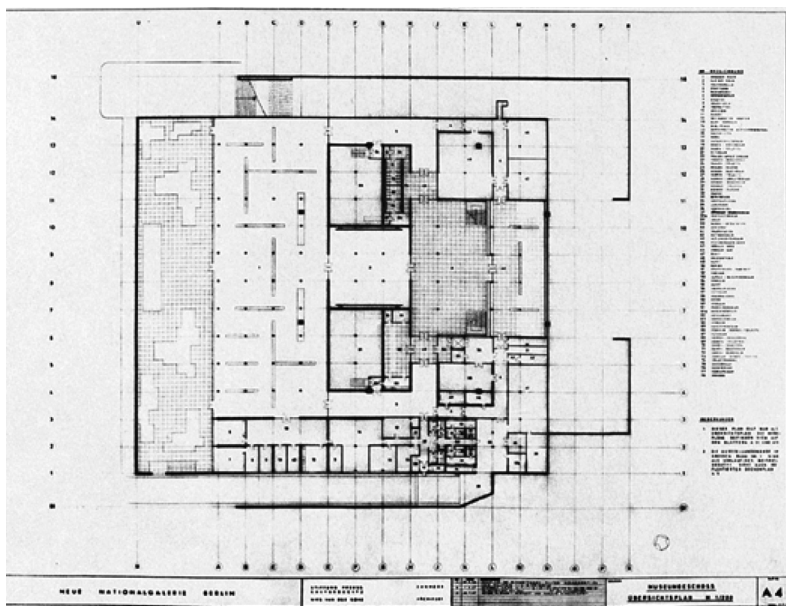
この建物には地下も存在し、基壇に埋め込まれる形になっている。新ナショナルギャラリーは美術館としての機能のほぼすべてを地下収容しているため、常設展示なども地下に存在し、地上部はもっぱら特設展の際に用いられる。そ

のため地下階は地上よりも広く、全体で 312×288 フィート（約 95×88m）あり，さらに地上部へと吹き上げたドライエリアが 312 フィートの辺に，幅 72 フィート（約 21m）で隣接している。

本論は，このような大きなスケールを持つ新ナショナルギャラリーが，普通の人間の高さの目線そのものからは本来感知しえないはずの，様々な視点をその人間に獲得させることと，そのことによってどの様に建物として経験されるのか，の 2 点を示すものである。その際，ここで「普通の人間」と呼ぶ主体のことを，鑑賞者と呼ぶことにする。また，この鑑賞者が目にするものを，総じて建物の見えがかり⁽⁴⁾と呼ぶことにする。

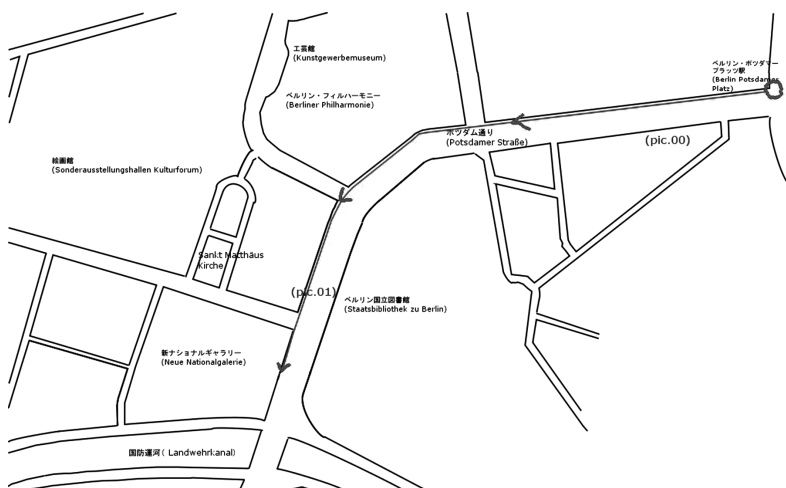


(pic.0-01) 新ナショナルギャラリー地上階平面図

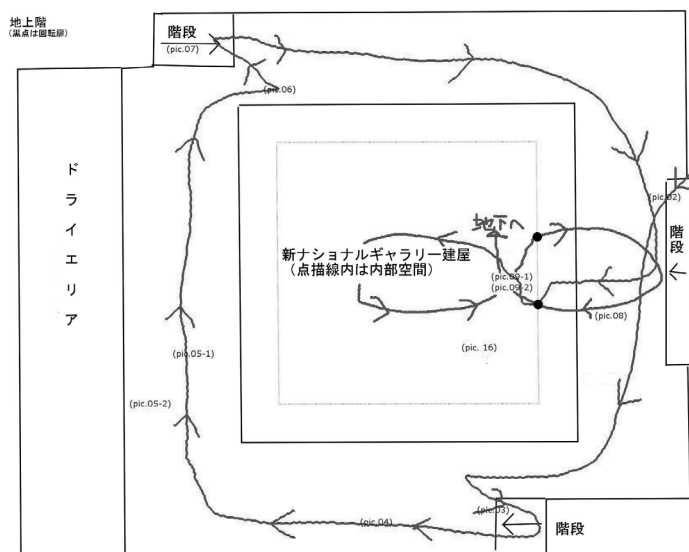


(pic.0-02) 同地下平面図

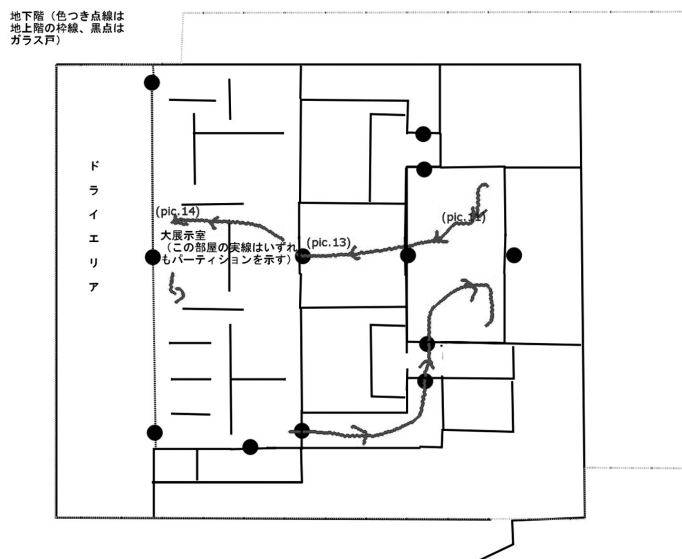
《本論》



(map.01)



(map.02)



(map.03)

以上に示したマップは、すべて著者が本論で想定する、新ナショナルギャラリーを辿る道筋を矢印で記載したものである。本論では新ナショナルギャラリーの本来の用途である美術館という機能を考えず、つまり展示品があることを想定せず、鑑賞者は建物を把握するためにこの道筋を辿る主体であるとする。画像はマップに記してある順に掲載する。本論では、この主体の辿る道筋以外の道筋を辿るかもしれない鑑賞者についても、この建物全体を、鑑賞者のスケールから確認する限りにおいて、ほぼ同様の認識で把握すると前提することにする。そしてこの前提を元に、本章では、この鑑賞者が各地点で何をどう見ることになるのか、画像とともに確認することとする。

〔地上〕

ベルリンの地下鉄、U-Bahn のポツダム・プラッツ駅を降りて、ポツダム通りを、ラントヴェーアカナルに向かって歩いていくと、黒い陸屋根を持つガラス張りの平屋が見えてくる (pic.00)。新ナショナルギャラリーの周囲には目立つ建物もなく、建物全体が少し浮いている風にも見えるせいで、上述したような建物の様子が通りを歩くだけでもよく見える。近づくにつれ、建物の浮いているように見える原因が、通りから一メートルほどの高さの基壇に乗っているからであるということに気付くことになる (pic.01)。建物を斜めから見上げる形で近づくことになるので、天井面とガラスが被る部分ではガラスが周囲の風景を反射しているように見え、底となっている部分は陰になり黒く見える。



(pic. 00)



(pic. 01)

ポツダム通り側に設置されている正面階段を使って基壇へと上ると、正面に黒い陸屋根と、それを支える二本の黒い鉄柱が目に入る (pic.02)。全面ガラスは、

天井の縁から数メートル奥まった場所に設置されている。地上階の左右対称の配置は、そのガラス越しに、一目で見てとれる。この建物に入るには、目の前にある二本の鉄柱の間に設置されている二つの回転ガラス戸を利用する。入り口から見て一番向こう側にある大理石パネルの壁まで、視界を遮るものは一切ない。そして内部に設置されているものはいずれも天井に接していない。一番天井に近い高さまである大理石の壁も天井に届いていないので、分厚い屋根を支えるものが、ガラスの壁の外側に配置されている鉄柱のみであることがわかる。そしてこの大理石の壁の役割は、もっぱら入り口から入ってくる進入者に内部構成の対称性を意識させるというものだということがわかる。ここでその対称軸のこと、つまり二つの設置物のちょうど真ん中を通ることを想定される線を軸線と呼ぶことにする。そして、鉄柱に支えられた陸屋根をもつ地上部の建物のことを、建屋と呼ぶことにする。この建屋はかなり大きく、それだけで存在感を持つものではあるが、それだけでなく、広く白い基壇の上に乗っていて、ポツダム通り側にある正面階段から見ても充分セットバックされた位置にあり、さらに周囲から持ち上げられた高さにある。

建屋の全貌を把握するため、鑑賞者は基壇に上り建物を反時計回りに一周するべく、左に進む。するとすぐ、入り口正面とは別に設けられた、ポツダム通りから基壇上へとアクセスするための階段が発見される (pic.03)。この階段から昇ると、この建物を斜めから少し見上げた形で見ることになるが、その視点からだと、黒い天井面とガラスの被る面積が大きくなり、その結果、反射面が大きくなり、また底部分が黒くなっていることがわかる。しかしこの階段を上り切ると、その反射面の面積が小さくなり、透明ガラスを通して中の様子がよくわかるようになってくる。そのため、正方形の建物であっても、どの辺が建物の正面になるのかが、ガラス越しに内部構成を把握することですぐにわかるようになっていく。特に、先ほど正面から確認できた大理石の壁や、木製の壁でできたコア部分などから、建屋内部が軸線に沿った配置になっていることがわかるようになっていく。



(pic. 02)



(pic. 03)

しかし壁やコアのせいで、建物の左側面から建物を見ると、今度は正面入り口とは一転して、建物の向こうを見通すにはあまりに遮蔽物の多いことに気付く (pic.04)。背高の石造りと思しき巨壁は、正面からでは分かりにくかったが、その側面積は随分と大きい。奥に教会が見えるが、まさにその巨壁のせいでかなりの部分が隠されてしまっている。建物の裏側へと回り、教会を正面に見てみると、基壇が割と高い位置にあることがわかる (pic.05-1)。左手はドライエリアとなっている (pic.05-2)。ドライエリアは正面から見て左右に広がっていて、建屋の一辺より幅が広い。



(pic.04)



(pic.05-1)



(pic.05-2)

ドライエリアの植栽は基本的に左右均等の配置になっており、その中央には大きな長方形の池がある。この池もまた左右に長くなっている。池を正面に見てそこから建物を振り返ると、先ほどの巨壁が今度は手前に見え、奥に木製の壁で覆われたコアが見え、池を中心に置いた中庭の対称軸と建物の対称軸が一致していることがわかってくる。この時点で、地下階もまたここで示された軸線に従っているのかもしれないと推測することもできるだろう。

建物裏からさらに右に回り、入り口正面から見て右側にあたる領域を見ると、いままで辿ってきた建物の四角形の四辺ともがほぼ同じく、十字型の鉄柱が二本が左右対称となる位置に配置されていることが確認できる (pic.06)。この端にも、道路から基壇へと上る階段が設置されている。正面階段の左側に設置されている、ポツダム通り側の階段と、この敷地の中央から見て恐らくは点対称の位置にあるだろうことが推察される。そして、この階段から眺めた建物もまた、斜め右から見上げるような形で見えるため、天井面とガラスの被る面積が大きくなり、反射面が大きくなっている (pic.07)。



(pic.06)



(pic.07)

基壇に至るための階段は3つとも、建屋を斜めから見上げさせるような場所に設置されているため、天井面とガラスの被る面積が大きく、ガラスの反射面も大きくなり、また庇部分の陰になって黒く見える面積も大きくなる。したがって、大きく黒い平たい屋根が、周囲を反射するガラスに覆われた空間に覆いかぶさっているという見え方になる。建物の角から見ていたので、隣り合った二辺を見ることになり、ガラスの反射と陰において把握される屋根の広がりと併せて、この建物、特に屋根の全体がどの程度の大きさ、広がりをもっているのかが強調されていると言える。本論では建物の全貌を把握するという目的から建屋をぐるりと一周したが、特に基壇上の建屋に関しては、どの階段を使用するとしても、アクセスする際に必ずその全体を把握する視点を鑑賞者に一度は経験させるものとなっているのに加え、基壇に上りきったところで見える内部の大理石の壁やコアが対照軸の方向を明確に示しているので、正面がどこかも鑑賞者にとっては極めて把握しやすい。少なくとも階段にアクセスする際の見えがかりは、鑑賞者に建物の全体を把握させるよう機能していると言える。

再び正面へ回ると、先ほど建屋の裏手で確認したドライエリアの植樹が、透明ガラスの向こう側に見えるのがわかる (pic.08)。また、裏手でドライエリアに接続された建屋内部の対称性は、当然ながら正面側からでも把握できる。回転扉から内部に入ると、屋根の天井部のT梁が格子のようになっていることに気づく。梁が直線的であるため、正方形の白い御影石が並んだ床面と併せ、上下にある平面がともにパースを強調しているように見える (pic.09-1, 09-2)。ただ、床面、天井面ともに幅広いため、上下の平面にある直線が強調するパースが示す消失点に向かっていているというよりは、上下の平面に挟まれている平面全体がパースに従って奥へ広がっていく様が強調されているように見える。



(pic.08)

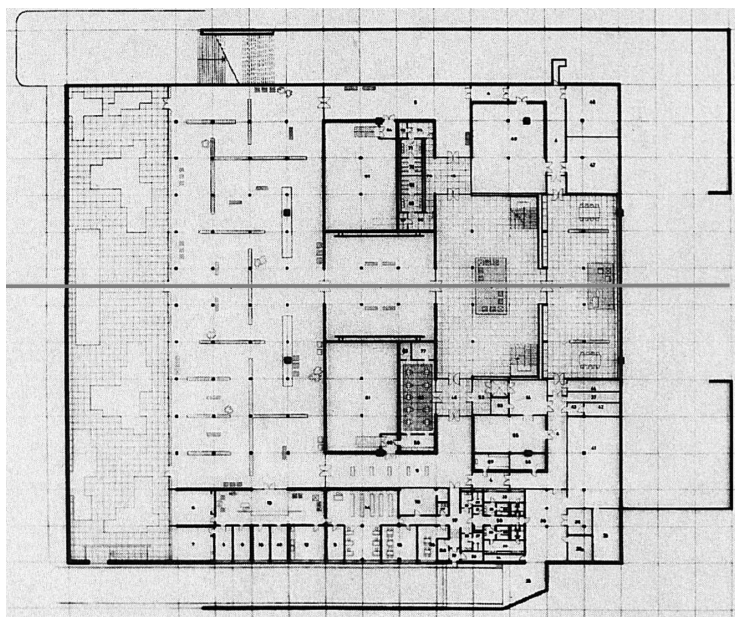


(pic.09-1)



(pic.09-2)

先ほども確認したように、基壇へとアクセスする階段を上るまでの過程で、鑑賞者は一度は必ず建物を斜めから見て、その広がり把握することになり、また上りきった段階で、透明ガラス越しに、軸の方向性を建物内部の構成から確認することができる。そして、その軸上にある唯一の階段が、本章で最初にアクセスしたポツダム通りに面する幅広の階段であることから、そちらがこの建物全体の正面方向であることがわかる。どの方向からアクセスしたとしても、少なくとも基壇に上った段階で、どちらが新ナショナルギャラリーという建物の正面方向かがわかるようになっていく。正面がわかるということは、その正面方向から見て最奥に当たる場所がどこかわかるということだ。つまり、基壇に乗っている建屋は、鑑賞者が少なくとも基壇に上った段階で、その規模と、この建物の持つ軸線方向を見てとることができるような見えがかりを持つということである。ここで、pic.10のような軸線が鑑賞者に想起されうることになる。

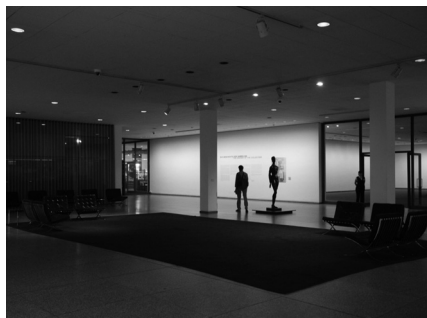


(pic.10)

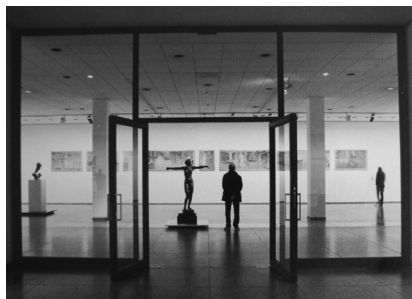
〔地下〕

階段を使って地下へ下りると、降りた先の部屋もまた地上部の対称性を維持したものとなっている (pic.11)。画像からでは少しわかりにくいですが、地上階入り口から見て長辺を正面と後ろに持つ長方形の部屋となっており、さらに正面方向（画像のガラス戸がある方向）には正方形の部屋、pic.11 には映っていないが、正方形の部屋の真向かいには、長方形の部屋が用意されている。この三つの部屋とも、地上階で示された左右の対称性を共有している。写真で言えば、黒いカーペットの長辺の真ん中を横切り、2本の白い柱の真ん中からガラス戸の真ん中、さらに正方形の部屋に渡って、先ほど言及した軸の面が横断しているはずである。このことが、ガラス戸を通じて視覚的に把握できるようになっている。しかも、天井の照明配置もその対照軸に沿っているため、ここで、地上で確認できた軸線を地下空間が共有しているのだらうと、pic.12 に示すような軸線を鑑賞者は想定できるだろう（無論、pic.12 に示したような、地下空間全体を想起することはできないが）。ただ、ドライエリア方向にある正方形の

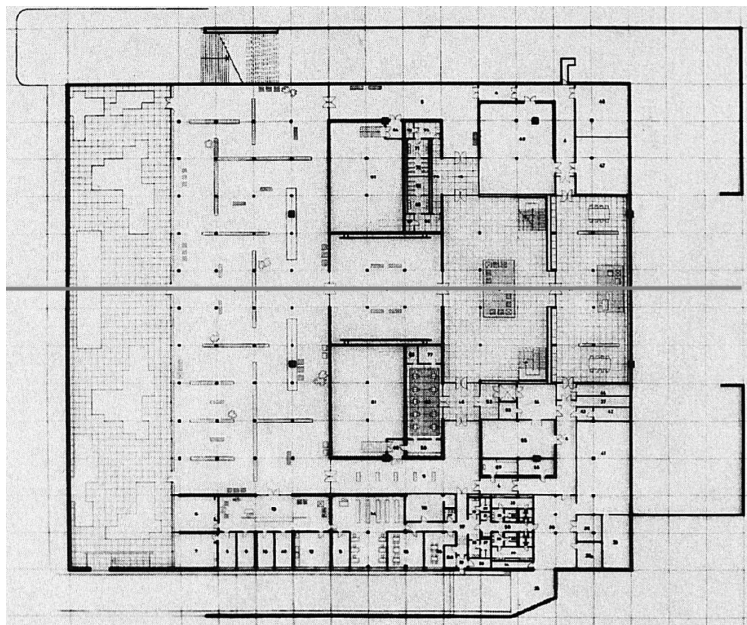
部屋からガラス戸を通してさらに奥へと続く部屋を見ることはできるが、その奥の部屋には壁が用意されていて、そこからさらに奥は、いまいる部屋からは見通せないようになっている (pic.13)。



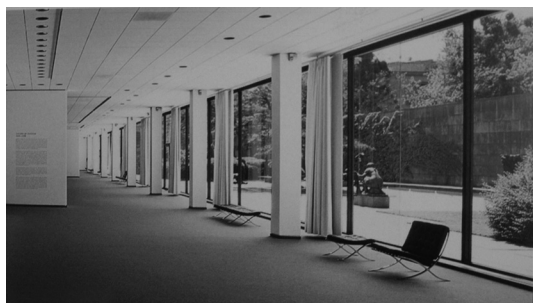
(pic.11)



(pic.13)



(pic.12)



(pic.14)

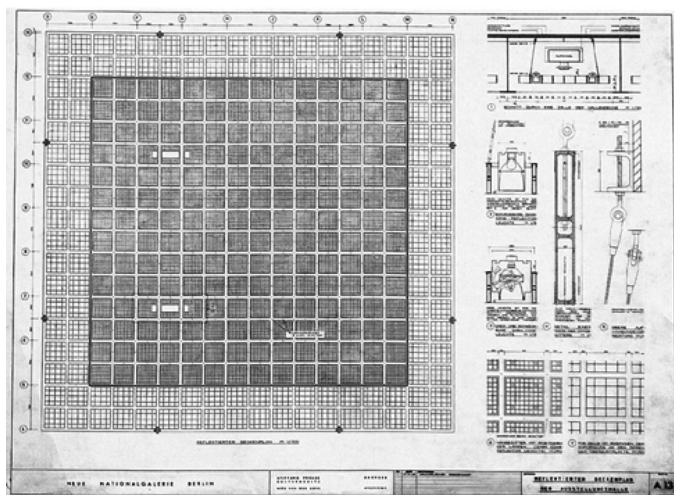
pic.13をよく見れば、天井部との接合がないため、壁というよりはパーティションと呼んだ方がよいものであることがわかる。このパーティションの奥に向かうと、ドライエリアを臨む空間に到達する (pic.14)。この空間のドライエリアに面した部分は全面がフルハイトのガラスであり、ドライエリアの全貌が一望できる。パーティションの真裏にある空間の正面には、地上からも確認できた長方形の人工池があり、最初に降り立った地下空間からこの人工池へと軸線が導かれていることが確認できると同時に、地上部の軸線と、地下で示された軸線が共有されうるものであることも確認できる。

ここでは、人工池が地上と地下の軸線を繋ぐ鍵となっている。というのも、地下に最初に降り立つことになる部屋から、直接的には地上と地下の軸線が確認できないからだ。最初の部屋で、ガラス戸や部屋構成、天井の照明配置などから確認できる軸線は、あくまでも地下空間が持つ軸線を鑑賞者に見せるものであり、地上の軸線と共通していることを鑑賞者は想起できはするが、それが本当に共有されているかは確認できない。しかし、地上から吹き抜けたドライエリア内にある人工池は、地上で見ても地下で見ても同じものであるから、それが基壇上の建屋と軸線を共有し、かつ地下の軸とも一致しているのであれば、地上と地下とが軸線を共有していると言えるはずである。

この、軸線が共有される、という言い方は、地上の基壇と地下の二つの平面を重ね合わせ、そこに一本の線を引くことで初めて可能となる。この重ね合わせで前提となっているのは、鑑賞者の俯瞰視点である。軸線が地上と地下で共有されていることが人工池によって確認されたと同時に、この二つが平面図的な視点で見られているということになるのである。俯瞰視点的な見方において結

び付けられた地上と地下であるが、無論、地下空間はそのすべてを把握することはできない。つまり、地上にある建屋のように、その空間を取り囲み、その全体を把握させるような外観が存在していないということである。実際、地下空間は、地上で提示された軸線に従った空間配置がなされているわけではない。しかし、地上で軸線が鑑賞者に捉えられた上でこの地下を観察した際には、少なくとも、その軸線にしたがった配置であるように見えるよう工夫されている、とは言える。そしてその工夫が地上と軸線を結び付けるのに寄与し、地下空間の全体なるものを鑑賞者に想起させることになるのであれば、地上の軸線を感知させるに至る建屋の配置こそが、地下空間の見えがかりとなる、ということになるのだ。

〔屋根〕



(pic.15)



(pic.16)

地下と軸線が接続されることで、地下空間の見えがかりとして機能することになる地上の内部構成であるが、しかし、鑑賞者は俯瞰視点を獲得して地下から地上に上がる際、この俯瞰視点では捉えられないものを目にするようになる。それが、建屋屋根の天井である。先ほど建屋内へと侵入した際には、外部から見てとれた軸線に沿った配置を感知しているゆえに、入口からドライエリアのある向こう側へ、という方向性を持った作りを強調するものとして天井のフランジを見ていたが、地下から地上に上がる際に、鑑賞者は軸方向から見て横に向いたくの字型の階段を上ることになるため、横方向にもフランジが直線的に走っていることに気づくことになる。フランジが正方形の形をしているので当然のことではあるが、建屋の内部配置と併せて入口から見た際に、この横方向の直線に気づきにくい、というよりは、横方向の直線に注目する必要がなかったと言った方が正しい。そういう意味で俯瞰視点を獲得した後、地下から階段を上る途中で、建物正面から見て横方向の直線を、鑑賞者は初めて目にするようになる。

このことが重要な意味を持ってくるのは、一つには、屋根が正方形の広がりを持つものであることを鑑賞者に再び気づかせうる点である。天井はすべて正方形で区切られていて、フランジも同じ幅なので、建屋の正面入口から見たときと同じような直線が、横方向にも同じように続いていると言える。つまり、天井そのものは、正面からでも、横からでも同じような直線を鑑賞者に見せるということである。また、正方形である、ということは、地上と地下で共有された軸線は、俯瞰図として見たときに、その屋根の正方形の中にある四本の対照軸のうちの一本に過ぎないということでもある。つまり、本来は正方形という形にはある一つの方向性を示す性質などはなく、むしろ軸線が全方向的に存在することから、どの方向から見ても対照軸の秩序に従ったように見えるという特徴を持つと言える。

そして、ここでもう一つ重要なことは、屋根がこの正方形の性質を持つものである、ということだ。この屋根は、自身が地上地下で共有された軸線という構成秩序とは別の秩序を持ちうるものである、ということを、鑑賞者に気づかせうるものである。これが重要なのは、特に地上地下を透視する俯瞰図的な見方が、屋根という存在を文字通り看過する見方であることに関係するからである。屋根という、これまで新ナショナルギャラリーの建物全体の秩序と思しき

軸線配置とは別の秩序を示しうる要素が建物全体を上から覆っている、という事実に気づくことで、鑑賞者は、俯瞰図的な見方において看過していた屋根の存在が看過できないものであることを知る。

しかし、鑑賞者にとって全方位的な秩序を持つ正方形の屋根とは、建物内部から見上げる、フランチによって小さな正方形が無数に並ぶ天井のことである(pic.15)。鑑賞者は、屋根を上から見ることはできない。俯瞰視点を獲得した鑑賞者にとって、建屋の屋根とは、地上と地下で共有されている軸線配置の秩序と別の秩序を示しうるものであるというだけでなく、俯瞰視点においては捉えられないものであるから、それ以外の視点ではじめて捉えられるものである。この視点とは、天井を見上げる視点である。この視点のことを、俯瞰視点に対し、仰瞰視点と名づけるなら、俯瞰視点が建物全体を平面的に捉えさせるのに対し、仰瞰視点は、俯瞰視点で一旦平面的に捉えられることとなった建物全体を、再び立体的に捉えさせる視点である。無論、仰瞰視点も、正方形の形をした天井という平面を見る視点であるから、その視点自体は、本来立体のものであるはずのものを平面的に見るものであることに違いはない。そう言った意味では、視覚的経験と呼びうるあらゆるものは平面的にしかものを知覚することはできない。ここで仰瞰視点において獲得されると言われている立体的なものの捉え方というのは、俯瞰視点というもう一つの平面的な建物の捉え方と並び立って初めてそれが可能となる。つまり、俯瞰視点一つでは捉えることのできない別の平面が存在することによって別の視点である仰瞰視点が鑑賞者に要請される、という事態において、その視点の複数性を与える建物に立体性が付与されるのである。単に、俯瞰図から見える平面と仰瞰視点から見える平面という二つの平面が並立している、というのではなく、屋根が俯瞰視点から見た際の見えがかりの秩序に一旦は従いその平面性に従属しながら、その視点からは捉えられない別の秩序を持つことを提示する、というプロセスにおいて、この建物は、鑑賞者に建物全体の平面的な捉え方を問い直させ、一旦は鑑賞者の持つ身体スケールから離れていた視点を再びそのスケールへと戻すのである。身体スケールを鑑賞者が取り戻すということは、そのスケールにおいて把握される建物の広がりや大きさが取り戻されるということであり、この広がりや大きさのことを総じて建物の立体性と呼んだのである。仰瞰視点は、鑑賞者自らの身体スケールをもって獲得された視点なのである。しかし、俯瞰視点に

おける全体視も一度は経験されているから、単にその立体性を取り戻している、というよりはむしろ、そのプロセス全体においてこの建物を、単に見えがかりの集積としてではなく、鑑賞者自身の視覚的经验において立体性を持つ建物として建ちあげている、と言える。この建物の建ちあげは、視覚的经验によって可能となるものなので、これ自体を統括するような一つの視点が存在する筈であるが、この視点はその視覚的经验をもっぱら言語で記述されることでのみ鑑賞者に獲得される。この視点のことを、ロゴスの視点と名付けるなら、新ナショナルギャラリーはまさにこのロゴスの視点によって建ちあげられるのである。

ロゴスの視点とはつまり、建物が持つ複数の見えがかりを視覚的经验によって繋ぐことで、建物が建物であると言及できるもっともたる性質の一つであるその立体性が、いかに視覚的に経験されうるものであるかを提示する視点であると言える。その視点が獲得されるプロセスは、建物によって様々であろうし、またその視点を語る主体によっても様々であろう。ロゴスの視点なるものが他の建物の視覚経験に対しても有効な概念として提示しうるかは未だ検証の余地があるものとして、今後の課題としたい。

<図版出典>

map.01 ~ 03: 著者作成

pic.0-01, 0-02, 09-1, 10, 12: Drexler, Arthur ed., *“The Mies van der Rohe Archive: an illustrated catalogue of the Mies van der Rohe drawings in the Museum of Modern Art, Part II, 1938-1967, the American work; Vol.19.”* New York: Garland Pub., 1992.

pic.00: <http://www.kulturforum-berlin.de/>のフリー素材

pic.01 ~05-1, 06 ~ 08, 11, 15, 16: 著者撮影

pic.05-2: <http://www.panoramio.com/photo/38447048> by Carl030nl

pic.09-2,13, 14: Jäger, Joachim, *“Neue Nationalgalerie Berlin: Mies van der Rohe.”* Germany: Hatje Cants Verlag, 2011

<参考文献>

Drexler, Arthur ed., *“The Mies van der Rohe Archive: an illustrated catalogue of the Mies van der Rohe drawings in the Museum of Modern Art, Part II, 1938-1967, the American work; Vol.19.”* New York: Garland Pub., 1992.

Jäger, Joachim, “*Neue Nationalgalerie Berlin: Mies van der Rohe*.” Germany: Hatje Cants Verlag, 2011

Schulze, Franz, “*Mies van der Rohe: A Critical Biography*”, Chicago: The University of Chicago Press, 1996.

-
- (1) I型の断面をしている大型の梁で、特にIの縦棒の部分のことをウェブと呼ぶ。
 - (2) ウェブの両端についている板状の部材のこと。Iの縦棒両端についている横棒。
 - (3) これらの数値データは、Arthur Drexler ed., “*The Mies van der Rohe Archive: an illustrated catalogue of the Mies van der Rohe drawings in the Museum of Modern Art, Part II, 1938-1967, the American work; Vol.19*. New York: Garland Pub., 1992.より引用。
 - (4) 一般的には、建造物の表に現れて目に見える部分、建材を剥がさなくとも見える部分。本論では、「建物の西側からの見えがかりは～」という風に用いることとする。